13　次の文章は、鎌倉時代成立とされる物語『あきぎり』の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。なお、本文中の「宰相」は姫君の「御」と同一人物であり、「少将」はその娘で、姫君の侍女である。

〈東京大〉　二〇一六年度出題

　（尼上ハ）まことに限りとおぼえ給へば、御乳母を召して、「今は限りとおぼゆるに、この姫君のことのみ思ふを、アなからむあとにも、かまへて軽々しからずもてなし奉れ。今は宰相よりほかは、誰をか頼み給はむ。我なくなるとも、父君生きてましまさば、さりともと心安かるべきに、誰に見るともなくて、消えなむのちのうしろめたさ」を返す返すも続けやり給はず、御涙もとどめがたし。

　まして宰相はせきかねたる気色にて、しばしはものも申さず。ややためらひて、「いかでかおろかなるべき。イおはします時こそ、おのづから立ち去ることも侍らめ、誰を頼みてか、かたときも世にながらへさせ給ふべき」とて、袖を顔に押し当てて、たへがたげなり。姫君は、ましてただ同じさまなるにも、かく嘆きをほのかに聞くにも、なほもののおぼゆるにやと、悲しさやらむかたなし。げにただ今は限りとして、念仏高声に申し給ひて、眠り給ふにやと見るに、はや御息も絶えにけり。

　姫君は、ウただ同じさまにと、こがれ給へども、かひなし。誰も心も心ならずながら、さてもあるべきことならねば、その御で立ちし給ふにも、われさきにと絶え入り絶え入りし給ふを、「何事もしかるべき御ことこそましますらめ。消え果て給ひぬるは、いかがせむ」とて、またこの君の御ありさまを嘆きゐたり。大殿もやうやうに申し慰め給へども、生きたる人とも見え給はず。

　その夜、やがての峰といふ所にをさめ奉る。むなしき煙と立ちのぼり給ひぬ。エ悲しとも、世の常なり。大殿は、こまごまものなどのたまへること、夢のやうにおぼえて、姫君の御心地、さこそとおしはかられて、御乳母を召して、「かまへて申し慰め奉れ。御忌み離れなば、オやがて迎へ奉るべし。心ぼそからでおはしませ」など、頼もしげにのたまひおき、帰り給ひぬ。

　中将は、かくと聞き給ひて、姫君の御嘆き思ひやり、心苦しくて、の草とも、さこそ思し嘆くらめと、あはれなり。夜な夜なの通ひ路も、今はあるまじきにやと思すぞ、いづれの御嘆きにも劣らざりける。少将のもとまで、

　　　カ鳥辺野のの煙に立ちおくれさこそは君が悲しかるらめ

とあれども、キ御覧じだに入れねば、かひなくてうち置きたり。

〔注〕○御出で立ち――葬送の準備。

○しかるべき御こと――前世からの因縁。

○阿弥陀の峰――現在の京都市東山区にある阿弥陀ヶ峰。古くは、広くこの一帯を鳥辺野と呼び、葬送の地であった。

○御忌み離れなば――喪が明けたら。

○中将――姫君のもとにひそかに通っている男性。

【人物関係図】

　大殿

　尼上

　　　　　　　　　姫君

父君

問１　傍線部エ・オ・キを現代語訳せよ。

問２　「なからむあとにも、かまへて軽々しからずもてなし奉れ」（傍線部ア）とはどういうことか、説明せよ。

問３　「おはします時こそ、おのづから立ち去ることも侍らめ」（傍線部イ）を、主語を補って現代語訳せよ。

◎問４　「ただ同じさまにと」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。

◎問５　「鳥辺野の夜半の煙に立ちおくれさこそは君が悲しかるらめ」（傍線部カ）の和歌の大意をわかりやすく説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　エ＝悲しいという言葉では、（月並みすぎて）言い表せない

　　　オ＝すぐに姫君を迎え申し上げよう

　　　キ＝姫君は中将の手紙を読みなさることさえないので

問２　Ａ自分（尼上）の死後も Ｂ宰相が姫君をしっかり世話をしてほしいということ。

Ｂのないものは全体０。

Ａ＝３〔「自分」のないものは減点２。〕

Ｂ＝７〔「宰相」「姫君」のないものは各減点２。〕

問３　Ａ尼上が存命でいらっしゃる時には、Ｂたまたま私が姫君のそばを離れることもあるでしょうが

Ａ＝４〔「尼上」のないものは０。「おはします」の訳が尊敬表現になっていないもの、「（この世に）存在する・生きている」の意味が明確でないものは各減点２。〕

Ｂ＝６〔「私」のないものは０。「姫君」のないもの、「侍る」の丁寧表現、「め」の推量表現の不備は各減点２。〕

問４　姫君が母の尼上の後を追って死にたいということ。

「死を望んでいる」という内容がなければ全体０。「姫君」「尼上（母）」を欠くものは各減点３。「後を追って」は「一緒に」でも　　　可。

問５　Ａ母の尼上に先立たれて、Ｂ姫君はとても悲しんでいるだろうということ。

Ｂの内容がなければ全体０。

Ａ＝５〔「尼上（母）に先立たれる」という趣旨がなければ０。〕

Ｂ＝５〔「君」を「姫君（あなた）」ととれていないものは０。〕

【現代語訳】

　（尼上は）間違いなく臨終と（自身で）思われなさるので、御乳母をお呼びになって、「（自分の命は）もう最後と思われるので、（後に残す）この姫君のことばかり考えるが、（私が）亡くなる後も、きっと軽々しくはないように（あなたが姫君を）お世話申し上げよ。今は宰相（＝乳母）よりほかに、（姫君は）誰を頼みになさるだろうか、いやあなた以外に頼る人はないはずだ。私が亡くなったとしても、（姫君の）父君が生きておいでになるならば、『そうはいっても』と安心であろうが、（その父君もいないので、）誰に（姫君の）世話を託すというその相手もなくて、死んでしまう後の気がかり…（はどれほど大きいか）」（ということば）を何度もくり返すけれども（最後まで）言い切ることができなさらず、御涙も抑えられない。

　（尼上にも）まして宰相は涙を抑えかねている様子で、しばらくは何も申し上げない。少しためらって、「どうして（お世話を）おろそかにするだろうか、いやおろそかにはしません。問３（尼上が）存命でいらっしゃる時には、たまたま（私が姫君のそばを）離れることもあるでしょうが、（尼上亡き後、姫君は、私以外の）誰を頼りに、つかの間もこの世に生きながらえなさることができるだろうか、いやできますまい」と言って、袖を顔に押し当てて、堪えきれない様子である。姫君は、（乳母にも）ましてまったく同じ（悲嘆の）様子であるなかにも、このように（人々の）嘆きをかすかに聞くにつけて、（自分は、気がおかしくなるほど悲しいはずなのに）それでもやはり（我を失うことなく）ものが考えられているのだろうかと思って、悲しみをはらすすべもない。（尼上は）本当に今こそ臨終と思いなさって、念仏を高々と唱え申し上げなさって、（そばの人々が）お眠りになったのであろうかと見るうちに、すでに御息も絶えてしまっていた。

　姫君は、ただ同じように（自分も死にたい）と、（亡き尼上を）恋しく思って思い乱れなさるが、どうしようもない。誰もが気は動転しているが、そのままにしておけることではないので、葬送の準備をなさるにつけても、自分こそ先に（死にたい）とそこここで気を失って（しまいそうになって）いらっしゃるが、「何事も（仏が導きなさる）しかるべき前世からの因縁がおありになるのだろう。お亡くなりになった方は、どうしようもない」と言って、またこの姫君の（悲嘆の）ご様子に嘆息している。（尼上の兄である）大殿も（姫君に）様々に申し上げてお慰めになるが、（姫君は）生きている人だともお見えにならない。

　その夜、そのまま阿弥陀ヶ峰という所で火葬に付し申し上げる。（尼上は）空しい煙となって（空に）お昇りになった。問１エ悲しいという言葉では、（月並みすぎて）言い表せない。大殿は、こまごまと（指示の）言葉などをおっしゃることが、（妹を亡くした悲しみのため現実感がなく）夢のように思われて、（ましてや、母を失った）姫君のお気持ちは、さぞかし（つらかろう）と自然と推量されて、御乳母をお呼びになって、「［乳母に向かって］なんとかしてお慰め申し上げよ。喪が明けたならば、問１オすぐに（姫君を）迎え申し上げよう。［姫君に向かって］心細い思いをしないでいらっしゃい」などと、頼もしい様子で言い置きなさって、お帰りになった。

　中将は、しかじかとお聞きになって、姫君のお嘆きを思いやり、気の毒に思って、鳥辺野の草（になりたい）とも（古歌にあるが）、さぞかし（そのとおりに）思い嘆きなさっているだろうと（思うと）、（姫君が）あわれである。夜ごと夜ごとの通い路も、今はふさわしくはないだろうかと思いなさる気持ちは、どなたのお嘆きにも劣らないのであった。少将（＝姫君の侍女）のもとに（姫君への手紙を託し、その中に）、

（尼上を焼く）鳥辺野の夜中の煙（とともに昇天できず）に残されて、さぞかしあなたは悲しんでいることだろう。

と（いう歌が）あるけれど、問１キ（姫君は中将の手紙を）読みなさることさえないので、（少将は）しかたなくそのまま置いておいた。